



私のドリ-夢メーカー

を全部回り、講演数は現在1700回を超えました。

私が命の授業で皆さんに贈りたい言葉が2つあります。「ドリ-夢メーカー」と「命の喜ぶ生き方」です。

私は、絶望を希望に変え、命に光と勇気を与えてくれる人達を「ドリ-夢メーカー」と名づけました。辛い時、苦しい時、ピンチの時、自分を見捨てず最後まで一緒になって頑張ってくれる人です。

首から下が全く動かなくなった時、

PROFILE

こしづか・はやと

1965年神奈川県生まれ。元体育教師・養護学校教員。スキーでの大事故で首の骨を折り、全身マヒの体。その後、懸命のリハビリにより社会復帰できるまでに回復し、事故をきっかけに人生も人生観も大きく変化。2010年3月教職を辞し、現在は「命の授業」の講演を通して命の大切さを訴えている。フジテレビ系「奇跡体験アンビリバボー」に出演。著書に『命の授業』（ダイヤモンド社）『感謝の授業』（PHP研究所出版）がある。



36歳。私にとって、最初のドリ-夢メーカーは両親でした。母は「替わるものなら替わってあげたい」と何度も言ってくれました。これは母親にしか言えない言葉です。父は「退院したら奥さんと一緒に家に戻ってこい。生きている間はお前の面倒を見てやる」と言ってくれました。でも、その時、この私に命を授けてくれた両親に申し訳ない、親より子が先に命をなくす一番の親不孝は絶対やってはいけない、とも思いました。

もう一人は奥さんです。彼女は私が手術室に向かう時、「私は何があってもあなたから離れないからね」と声をかけてくれました。辛い時、苦しい時、ピンチの時、自分を見捨てず最後まで一緒になって頑張ってくれる人です。

かけてくれました。辛い時、苦しい時、ピンチの時、自分を見捨てず最後まで一緒になって頑張ってくれる人です。母は「替わるものなら替わってあげたい」と何度も言ってくれました。これは母親にしか言えない言葉です。父は「退院したら奥さんと一緒に家に戻ってこい。生きている間はお前の面倒を見てやる」と言ってくれました。でも、その時、この私に命を授けてくれた両親に申し訳ない、親より子が先に命をなくす一番の親不孝は絶対やってはいけない、とも思いました。

次に出会えたドリ-夢メーカーは看護師さんです。人に頼るのが大嫌いだっただけに、家族にも言えなかった「助けて」という言葉を言ってくれ、と教えてくれました。「助けて！」と言うのは弱い人間だからではありません。今は一人で頑張る時じゃない。周りの人の力を借りていいんです。元氣になったら周りの人を助けてあげて下さい」と。看護師さんはそのままの私を受け止めてくれました。私はこの「助けて！」という言葉が言えてからスイッチが入り、生きる勇気を貰いました。もう一人はリハビリの先生。「今は人生に絶望しているかもしれないけれど、